

2003年 教育映像祭 優秀映像教材選奨

ビデオの部 学校教育部門（中学校向）

最優秀賞（文部科学大臣賞）受賞

文部科学省選定



VHS 又は DVDビデオ
ライブラリー価格 ¥50,000

風の旅人

人権啓発アニメーション
障害者問題編（30分）
企画 三重県・三重県人権問題研究所

ほんとうの自立とは、
他者の力をどれだけ借りられるか、
にかかっている

原作・監修 牧口一二

宇都宮辰範くんがヘット式車いすのまま天国に旅立って十六年たった。いまも天使たちに車いすを押し回らされて、あちこち駆け巡っているのかなあ。彼は私より十歳ほど若い。あちこち私に私を師匠だ。どれほど生き方の幅を広げてもらったことだろう。

彼と出会ったのは私が四十半ばのころで、障害者仲間が「そふ風のように街に出よう」と合言葉に、「そふ風」ならぬ「木枯らし」に立ち向かうように果敢に、なんの設備も配慮もない街に繰り出しはじめたころだった。宇都宮くんは先駆けの一人といつてよい。

ちよつと障害者の市民運動をはじめたころの私は、彼の行動力そして生き方に強烈に惹かれた。しかし当初は「強い奴やなあ」と圧倒され、憧れにも似た気持ちで「尊敬はできるけれど真似はしたくないなあ」と思っていた。「強者だけが生き残れるのは人間の社会ではない」との思いから、彼の強さに少し抵抗さえ感じていたのだった。

わがアパートに泊まってくれた初めて出会った日の夜、「ちよつと強すぎるよ」と率直に話してみた。すると一瞬、笑顔だった彼の顔がくもり、しばらく間があった。「お前は頭でしか考えてない。体と心、全部で考えてくれよ」と言ったのだ。「もし俺と同じ状態になれば、ほとんどの人は同じような行動をはじめめる。ただし、俺を外へ連れ出したあのケッタいな青年のような奴との出会いもあってのことだけれど」と続けた。この言葉に、ひよつとした私でも……と勇気がわいたのだった。それとともに「ケッタいな人」の存在の重要性にも気づかされた。ヘンな奴に出会って、こちらの方が動き出すわけだから。

このアニメーションの基になったマンガ本『風の旅人』は二年前に出版されたが、その企画段階で、せひとも宇都宮くんの遺族に了解を得ておきたくて、初めて愛媛の彼の実家を訪ねた。が、悔しいことに、彼の生き方にもっとも影響を与えてであろう母上が七年前

に亡くなられていた。でも、父上と五つ上のお姉さん、そして叔母さんにお会いでき、彼との思い出にしばし時を忘れることができた。宇都宮くんは単に強い奴ではなく、むしろ他者の気持ちや世相を敏感にキャッチできる。テレケートで柔軟な心を持ち主だった。彼にあらためて惚れ直した。そして彼の遺志を継ごうと決心した。

宇都宮くんは「地球上の六十億の人間はすべてつながっている」といつも言っていた。だから一度でも出会った人を「友」とし、その想いを日常生活で実践してみせたのが「キャッチボール式歩行法」だ。そうして一度でも出会った友を増やし続けたのだ。自立とは何か、を問いかける「重度健全者リハビリテーションセンター」も彼らしい哲学的発想だ。

この世に完璧な人間なんていない。一人の能力には限界がある。「手伝って」あるいは「助けて」の一言が素直に出れば、どれほど弱くなるだろう。助けてもらえは自力では不可能なことも可能になり、どれほど世界が広がるか計り知れない。「ほんとうの自立とは、他者の力をどれだけ借りられるか、にかかっている」と。これも彼の口ぐせのひとつだった。遺言のように思えてならない。

人間社会の共通ルールは「人に迷惑をかけるな」である。しかし、われら障害者は、絶対にかけてはならない迷惑、かけたくない迷惑、許される迷惑、かけたほうがいい（かも）迷惑……を使い分けて生きたいと思う。そのほうが人と人の関係がテレケートに、そしてダイナミックに展開していくように思えるからである。

原作・監修 牧口一二
脚本 多比良建夫
音楽 小室等
キャラクター原案 新谷知子
作画監督 吉嶋誠
美術監督 西山礼児
撮影監督 滝沢潤
音響監督 井澤基
制作 小倉正敏・藤井正和
プロデューサー 多比良建夫
監督 森田浩光
制作 著作 関西支社
©2003 DENSHU TEC INC.
平成15年3月 完成